

## 「政治」と向き合う

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

### 1. はじめに

2021年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2021年10月26日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(神菌麻智子氏:渋谷区議会議員)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である星野桂汰さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

### 2. ゲストティーチャーの話

#### (1) 自己紹介

【ゲスト】皆さんこんにちは。渋谷区議会議員の神菌麻智子と申します。今日のタイトルは、「子どもも大人も育ちあう『共育』のまちづくり」です。この名字を見て気づく方は結構な鹿児島通です。草かんむりの付く「その」は鹿児島によくある名前です。高校生までは鹿児島におりまして、大学は熊本の大学を卒業し就職したベネッセコーポレーションの勤務地の関係で東京へ出てきました。

現在は渋谷区の区議会議員として活動しています。学校現場での実践を積み上げるため副業で、新渡戸文化学園で「NITOBE FUTURE PARTNER」としても活動しています。それ以外にも地域のボランティア活動になりますが、子育て世帯向

けの「渋谷 papamama マルシェ」というイベントをやったり、「We are Buddies」という大人と子どもがバディーを組んで、斜めの関係で一緒に成長を見ていこうという活動をしたり、「子どもテーブル」という渋谷区版子ども食堂の活動をしたりしています。現在は、渋谷区の区議会議員をしていますので、渋谷区在住です。夫と小学3年生の子どもと3人で暮らしています。地域活動についてなぜ触れたのか、後で少し種明かししていきたいと思っています。

#### (2) 渋谷区の基本構想

【ゲスト】私の住んでいる渋谷区ですが、「ちがいをちからに変える街」という基本構想があります。会社でいう「ビジョン」の部分になります。「ちがいをちからに変

える街」を目指して、渋谷区は色々な事業を推進しています。私自身は「子育て」と「教育」の2つを中心の政策として推進していきたいという思いを持っています。

### (3) 前職のベネッセコーポレーション

【ゲスト】区議会議員の話の前に前職のベネッセコーポレーションの話もさせていただきます。

私は大学時代に環境問題の活動をやっています、サークルとかNGOとかにも入っていたのですが、そこで出会った価値観が「Think Globally Act Locally」です。世界規模で考えることも大切ですが、考えているだけじゃ物事は進まないし、実践していくことも大切ということで、地道に目の前にあることをやっという話と、「1人の100%より100人の1%」、1人の人が100%頑張ると、世の中を変えていくのではなく、100人の人が何かしらに課題意識をもって1%頑張ると、その1%が少しずつ増えていくことで、世の中がダイナミックに変わっていくのではないかとということに大学時代の活動を通して気づきました。そこで色々考えて行きついたのが、学校教育でした。もともと両親が教員ということもあって、教育は近い存在だったということもありました。学校教育の中で、子どもたち一人一人が社会に対して課題意識とか興味関心をもって社会に出ていく、その種が1つ1つ芽吹いていくような、そういう現場を作るとよりいいのではないかと大学の時に考えました。教員になってその子どもたちに深く関わっていくことも選択肢としてありましたが、私はベ

ネッセコーポレーションという会社を選択しました。「ベネッセ」は、ラテン語で「よく生きる」という意味をもっているのですが、人が生まれてから、最終的に死ぬまでの一生をどうよく生きていくかをサポートし、支援しようという会社です。その中でも特に子どもたちに対する事業がたくさんある会社なのですが、私は学校をサポートする事業を担当していました。全国の90%の学校とお付き合いをしているような部署でした。先生になって深く関わる方法もあるかもしれないけれども、広く浅くかもしれませんが、全国の学校の先生方を通じて子どもたちに関わっていく仕事、面で世の中を支援していくことができるかもしれないと、子どもたちが問題意識や課題意識の種をもって、社会に出ていくようなことを実現したいと思ってやっていました。このことは今も変わらずにある想いです。

このような活動をする中で、ある一人の先生と出会いました。大正大学の浦崎太郎先生です。その当時、浦崎先生は岐阜県の高校所属でしたが、中学校に交換人事で異動された時に学んだことをベネッセの社員に話してくれました。中高連携に関するお話でしたが、大変感銘を受けた私は岐阜県に通うことになりました。通っている時に保育園から高校までの、様々な教育に関わっている先生方と何度もワークショップを行いました。そこでの気づきが、高校現場だけで子どもたちに教育をしてもなかなか変わらないということでした。ではどういう風にやっていく必要があるのかということですが、子どもが生まれてから高校生に至るまで、そこに地域が家庭や学

校と連携しながら、どのように関わっていくかということをしっかり縦で一通貫で考えていかないと難しい、ということでした。やっぱり未就学の子どもの土台がすごく重要で、その土台がしっかりしていないと結局いくら学校で頑張っても砂上の楼閣じゃないですけども、崩れ落ちそうになるということに気づきました。このことは最新の研究結果などでもデータで示されています。特に子どもの心身の安全基地というのはやはり家庭だしその家庭の中で特に家庭が孤立してしまうと、大人も不安定な状態になって、子どもも不安定になります。そのためには地域のサポートや支援や繋がりが重要だということに行き着きました。そもそも人間は太古からコミュニティーで子育てをずっとしてきていて、みんな助け合いつながらしていたのに、それが現代社会だと近くにたくさん便利なものがあるので、例えばスマホ一個あれば、生活が完結しちゃいますからね。でもそれでは、物質的な不足は満たされても、精神的な不足は満たされませんし、ちょっとしたお願いとか手助けみたいなものも生まれませんよね。

#### (4) 子育てと地域

【ゲスト】子育てに地域は必要ということに関して、実際私も子どもが生まれて、ベネッセを一年間お休みしながら子育てしてきましたが、すごく重要だなということに気づきました。子育ては毎日続きますが、初めてのことなので一人で向き合っていると辛いことがたくさんあります。産後のお母さんは全治二か月くらいの傷を負っ

た状態で子どもを出産しているのですね。すごい体にもダメージがあるし、そのダメージが回復するのにすごく時間がかかります。筋肉も低下して、体の色々な機能が落ちる状態になります。例えば、母乳で育てていると、母乳を一日与えるとラグビー1試合、517キロカロリーを消費したくらいになります。それをやっぱり毎日しているわけです。しかも子どもは言葉が発せないで、泣くことで色々な意思を伝えてきます。子どもたちは最初は生活リズムが整わないから夜泣きするのですが、飛行機の頭上を80デシベルでずっと飛んでいるような状態が続きます。2、3時間くらいしか寝むれないのですね。そういう状態でやはり1人とか夫と2人とかで子育てすることはとても苦しいですね。毎日のことをわざわざ遠くにいる人にネットでちょっと相談することは難しかったり、物理的なサポートはなかなか得られなかったりします。お互い助け合えない。そうすると徒歩10分圏内にいる友達であったり、近くのママ友が一番力強い存在になりました。

渋谷区には子育て支援センターという施設があって、みんな徒歩10分圏内に家がある人達が集まってきます。お母さん達と出会ったことによって私もすごく楽しく子育てができるようになったし、ちょっと悩んだり苦しいことがあったらすぐに相談して、お互い助け合えるような関係ができました。そこでできたのが、「渋谷papamama マルシェ」というイベントです。今年で6年目になりますがオンライン開催で、それまでは色々な渋谷区の場所を借りて行いました。主に0歳から3歳の子育て世帯をターゲットに活動しています。

渋谷区は大体毎年 2000 人くらいの子どもたちが生まれています、その分パパとママも増えているということで、世代を超えて、語り合える場、渋谷区で子育ての支援をしている団体の皆さんと出会えるような場を作りたいという思いで活動しています。

この活動を始めた理由は、自分たちの世代でできたコミュニティを次の世代に繋げたいよねということと、もう一つは 0 歳から 3 歳まで特に 0 歳での虐待死がすごく多い状況に対して、孤立の子育ての中で追い込まれて、後はどうしようもなくなってしまっただけに子どもに手をかけてしまう現状があるということ、もう一つは望まない妊娠をしてしまって、生んだ後にすぐに殺してしまう現状があるということです。渋谷 papamama マルシェの中で、初めての子育て層に対して、共通体験やゆるやかで長く繋がれる関係性を提供することは私たちもできるよねということです。例えば、障がいのあるお子さんを育てているとか貧困の問題で課題をすごく抱えているというようなマイナスの要因を抱えているご家庭に対してはボランティアの活動では限界があります。そこは行政の役割かなと思っています。

#### (5) ボランティアから行政へ

【ゲスト】ここまで地域の力の重要性についてお話ししてきましたが、でもそれをするためにはベネッセじゃできないということにも薄々気づいていました。やはりベネッセは企業なので、サービス事業を買っていただいた方に対して支援していくこ

とになりますし、渋谷 papamama マルシェで未就学が大事だということにも気づきましたが、ボランティアだと限界があります。特に先ほどお話ししたマイナスをゼロにするような活動は、難しいと感じました。そのような中である日「お母さんの夢ななに？」と娘から聞かれたのです。冒頭ご紹介した子どもたちの問題意識の種をもって社会に出てもらうみたいなのが入社当時の夢ですけども、ちょうど 15 年くらいベネッセで経って、大学入試改革とかも大きく動いて、特に探究活動がここ 5、6 年ですごく進みました。私が退社する直前は 5 年間くらいタブレットを使って、サービスを推進していく部署にいました。そこでは世の中が大きく動いたなという実感を持てたのです。まさに探究は私がイメージしていた「課題意識の種をもって子どもたちが世の中に出ていく」っていうことの大きなきっかけになってくるという感じがしました。

さっきお話しした地域の力を子どもたちの土台を作るところに生かしていくこと、これが私の次のチャレンジ、夢だなど娘の問いから気づいたのです。そして色々考えた結果、私は地域に根差す自治体の議員になることが、今の私のキャリアを生かせるかなと考えました。渋谷区議会議員の選挙が 2019 年にあつたので、選挙に出ました。

「区政レポート」を出していますが、その中の一コンテンツに子どもたちに議会の仕組みを知ってもらうパートを作っています。ここで皆さんに「問い」をお渡します。「政治って何だろう？」です。

色々なイメージがあると思いますが、私

は、みんなで集めた力をどう分配するかということだと考えています。例えば、太古の時代にみんなで食料を集めるためにマンモスを倒すぞって言って倒したとしますね。その中でジャイアンみたいな力が強くて「おれすげーぞ」みたいな、要は権力者がいたら、「俺が胴体全部もらう、後の奴らは鼻と足だけだ」みたいな感じになった場合、せっかくみんなで力を合わせて、マンモスを得たのに、どうやって分けるっていう時にちゃんと話し合いをして、その分配するルールや議論の過程がないと、ジャイアンみたいな 1 人勝ちの世界になってしまうと思うのですよね。それを避けるために、民主主義が生まれて、みんなで集めた力、今で言うと税ですね、納税していただいた税をどのような分野に分配して、それをどうやって使っていくのかという方向性を作って、決定していくことが政治だと考えています。

その中でも国、都道府県、区市町村はそれぞれの自治体の規模によって役割が変わってきます。国は全国的なことや国対国の関係性、国際的な仕事を考えたり、決めたりしています。国に関しては憲法や法律の話が出てきたり、それをもとに全国規模の大きな枠組みの中でどう分配していくかを考えます。特に外交問題は国政、国の話です。

それが都道府県になると広域的なくくりでやった方がいい部分の議論になります。例えば、水道などインフラ事業は都道府県がやっています。学校に関しても、県立の高等学校はエリアが大きくまたがりますので、都道府県がやっていますね。あとは採用も一区市町村だと色々な先生た

ちを採用するのが難しいので、都道府県の教育委員会のレベルで採用して、各自治体に赴任されていく仕組みになっています。

区市町村は本当にみんなの生活の身近な仕事をしています。私は区議会議員なので、まさに身近な仕事をしています。主に福祉ですね。高齢者の方や障害のある方の福祉をどのように支援していくか、学校に関しては小中学校の義務教育の分野をやっています。

私が区議会議員をやっている思ったことがあります。チェッカーという役目で調査したり、本当に正しくやっているのかということも当然やっているのですが、それだけじゃない仕事も議員はできるのではないかと思ったのです。具体的には、地域をつなぐ存在になれると思ったのです。要はプロデューサー的な存在です。少し紹介していくと、まず町の声を集める、課題をまとめることをやっています。そして、それを踏まえて課題解決、アイデアを創出することをやっています。これも自分が考えてそれを提案するだけでなく、みんなでアイデアを出し合う。私は共に育ち合う町を作ろうと思っているので、共に考える、共に創出する場を作っています。そして、これは議員の私しかできないのですけれども、議会や議会に紐づく委員会とかで行政の方に提案し、実践していく仕事をしています。

例えば、2019 年 9 月、私が議員なりたての時に提案したのですが、教育の仕事をしてきたので、教育の質問をたくさんしました。そこで ICT 教育を渋谷区は他の自治体よりも先行して、LTE っていう携帯の電波が入ったタブレットを配っていた

ので、それをさらに促進していく提案をしました。

私がこれから目指していきたい町づくりに関して最後お伝えしたいと思います。共に育つということ、大きくは子育ての環境をどう作っていくか、学びの場をどう作っていくか、やはり街の人たちの力が子育てにとっても学校教育を変化していくことにおいてもすごく重要だと考えています。結果的には子どもも大人も一緒に成長していけるようなみんなで育っていけるような街にしたいです。例えば、子育てに関しては、「子どものために」と言って動く人が結構いるのですが、私の場合は「子どものため」じゃなくて、「子どもと共に」ということで、子どもたちと一緒に変えていく、子どもたちが主人公だよねというところを大事にしたい、みんなで行ってほしいという思いでやっています。また、学びの場に関しては、学校だけではなく、やはり地域と共に学校がある状態にしたいなと考えています。

## (6) 質疑応答

【参加者】ICT教育の話に関して、ICTは、神菌さんのいう子どもと共に成長していくという理念にマッチしていると感じました。コロナ禍で子どもたちが繋がる点はすごくいいなと思いましたが、教員の負担が大きくなっているとも感じます。教員の負担についてどのようにお考えですか。

【ゲスト】私は慣れるまでは確かに負担かと思いますが、慣れたら逆に効率化できると思っています。例えば、板書一個にして

もパワーポイントなどであれば、一回作れば、ちょっとした微修正で全部同じものが投影できたりするじゃないですか。例えば書く時間も減るし、色々な先生方でシェアできると思うのですよね。また、よく言われるのが、先生たちの会議もプリントを1枚1枚印刷して何十人にも配布している。これもすぐに資料共有して確認していく。効率化のために必須のツールだなと思います。デジタルなしでは生きていけない、仕事できないですから、子ども達にそういう環境を作る。子ども達のこれからの未来を考えてもやるべきだと思いますし、逆にやらない選択肢がないと思っています。

【参加者】双方向オンライン学習についてお聞きしたいのですが、数学で双方向の授業はオンラインでできそうでしょうか。

【ゲスト】はい、できます。何で断言できるかというと、やっている先生たちを知っているからです。数学に関しては前提としてオンラインの双方向を行うときに、全員がオンラインの中にいる状態が作れば、それなりにできるのではないかと考えています。工夫していらっしゃる先生は、反転学習じゃないですけど、事前にインプットしたい情報を動画で掲載して生徒たちに事前の学習として見てもらって参加してもらい取り組みをされています。実際、答案を作ったり、回答を作ったりしたものをペアワークなどでやり取りさせて、プレゼンさせたりとかですね。

【参加者】若者の政治の意識についてお伺いします。子どもたちが、将来自分たちの

## 「政治」と向き合う

力を発揮して街づくりをしていくことを念頭に置かれていると感じましたが、どのように主体的に意見を表明する場所を作っていくべきだとお考えですか。

【ゲスト】今渋谷区で「シブヤ科」をやっています。探究の取り組みですけれども、小学3年生から中学3年生までの総合的な学習の時間でやっています。渋谷の街をテーマに自分たちで問いを見つけてその問いに対してどのような課題があって、その課題に対してどのようなアプローチで提案していくかを各学校で2021年4月から取り組んでいます。例えば、代々木中学校では、「ちがいをちから力に変える街を作る」ってどういうことなのだろうという大きなテーマで考えていて、1年生の時は人にフォーカスしています。自分と違う人、障害を持っている方、生活が困窮している方、海外の方、色々な違いのある方たちに対してオンラインを使いながらヒアリングして、違いがあることを前提に、その違いをどうとらえて、それを一緒にエンパワーメント、力に変えていくためにはどうしたらいいのかを1年生の時にやっています。2年生になったら街の課題を解決することで違う力に変えられるように、バリアフリーの問題やゴミの問題をどう解決していくのかを考えています。3年生になったら課題ではなくて魅力にフォーカスして、渋谷の魅力をもう一回見つめ直して、世界に発信していこうと取り組んでいます。そういう活動をしていく中で子どもたちは自分たちの街は自分たちの力で変えられるのだという実感を持てるのではないかと考えています。議員としてできるこ

とはそういう場や環境を作って、支援していくことだと思います。

【参加者】渋谷区では子育て支援団体がたくさんあるとおっしゃっていましたが、具体的に行政はどのように動いているのですか。逆にボランティアが充実しているがゆえに圧迫したくないから議会はそれほど動きたくないということはあるのでしょうか。

【ゲスト】行政の動きとしては先ほども「福祉」と言いましたが、なかなか民間だと難しいと感じています。やはり生活困窮しているご家庭に対するフォローアップに関して、生活保護の問題として行政が受け止め、相談していきべきだと思います。生活保護を受けているご家庭でお母さんが、例えば、精神障がいなどがある場合は、相談先として障がい福祉課がありますが、そこに生活保護のチームから繋げて、精神障がいの手帳を発行して、手帳が発行されるとそこにお金がついたりします。行政は部署同士が連携しているので、個人情報に気を付けながらも、チームで連携してやりましょうということができます。

民間は、言葉は悪いのですが、「点」での支援にどうしてもなっちゃうのですね。その「点」を「面」にしていけるのが、行政だと思います。行政は面でサービスを広範囲で持っていますから、民間人にも協力していただいて、強化していくことが大切だと思います。

【先生】神菌さんが目指している地域のあり方は、旧来型の地域とは違う形のもので

はないかと感じましたが、どのような地域像を描かれていますか。

【ゲスト】渋谷区だからこその特徴かもしれませんが、渋谷区は大体20万人ぐらいの人口ですが、出入りが激しい街です。もう一つは昼間人口、お昼にいる人たちの人口が、20万人の倍ぐらい40万人近くいます。要は働きに来てくれる人や学びに来ている人が多いのですね。そういった中で例えば、私も鹿児島に住んでいたのですが、既存の地域コミュニティとなると自治会やPTAなどがありましたが、渋谷区でも既存団体のコミュニティはありますが、既存の団体さんは世代交代があまりうまくいってない課題があって、ちょっと疲弊されていると思います。そこを新しいコミュニティ、新しいコミュニティとは何かということチャレンジしているのですが、キーワードは一つテーマや課題に対してコミュニティを作ることです。渋谷区は色々な力を持っている人がいっぱいいます。そういった人たちがプロジェクトベースで2年間くらいかけて課題解決していこう、解決したら一端解散でいなくなるということを無数にたくさん繰り返すことが、これからの新しい地域のあり方やコミュニティの形成の方法かなと思っています。一つの例として、最近動き出したのが、一般社団法人のユナイテッドというものを10月に渋谷区が立ち上げました。部活動の民間支援が目的です。要は部活を支援してくれる外部人材バンクを作って、学校の部活との繋がりを広げて、地域型の部活に移行していくというものです。